

「現地を訪問して想うこと」

2010年（平成21年度） 国際関係学部 卒業
野毛 みなみ

今回の東北応援ツアーは、私にとって「念願」のツアーでした。

震災後、幾度と東北へ行きたいと考えてきましたが、親せきや知人もおらず知識もない自分が単身で訪問して学ぶことができるのか、自分が行って何ができるのか…不安が先走りしなかなか行動に移せずにいました。そんなとき、友人からツアーへの参加を勧められ、東北へ行く機会を得ることができました。

実際に福島へ訪れてみると、時間の経過を感じる瞬間と、時間が止まっているように感じる瞬間がありました。

バスの窓から見える景色には、津波の被害で建物が流された土地が広がっていますが、瓦礫はきれいに片づけられており、新築の住宅が並んでいる地域もあるなど、見た目だけでは津波の被害を感じることができず、自分が躊躇して来なかった2年半という時間はとても長いように感じました。

対して、実際に震災の被害にあわれた校友の方々の話を聞くと、今回見ることのできなかつた原発に近い地域では瓦礫の片づけが十分でないことや、汚染土壌の処分ができずにいること、原発事故による風評被害が収まらないことなど、復興にはまだまだ時間がかかるのだと感じる場面が多くありました。

最近では震災や原発事故に関する報道も激減し、現地の状況を把握することが難しくなっています。そのような中、実際にその土地に住む方々の話を現地で聴けたことは、本当に有意義で貴重な経験であったと思います。

自分一人では大変非力ですが、今回お世話になった校友の方々や福島の方々のお話を、多くの人に伝えていこうと思います。